

詩人と傳記作者

——盧藏用が抱いた文學觀と陳子昂の形象化——

永田知之

京都大學

一 はじめに

文學者に對する評價が、その作品を通して行われるのは當然である。もとより作品が既に散佚、或いは少數しか残らず、作家としての聲價のみ傳わる場合も存在する。だがそれらは、あくまでも特殊な事例でしかない。ただ作品だけに頼つて全て事足りるかといへば、事態はそれ程に單純ではない。書き手と現在の読み手である我々の間には、過去の批評が集積している。それは純粹な作品の解釋だけではなく、文學者の傳記の記述なども含む。作家が古典文學の作者であり、また高い評價を有する時、通常、それは

詩人と傳記作者（永田）

膨大な量に達する。これら「読み」の歴史は、往々にして強い固定觀念となり得る。中でも生前の文學者に近かった人々が彼らについて残した證言は、何らかの先入觀を讀者に植え付け易い。これらの事象を無視して作品に接しても、作家へのより完全な認識に到達、即ちその實像に迫るのは難しい。

ここに取り上げる初唐の陳子昂は、その典型である。筆者は先に「先達の姿——唐人の意識下に於ける陳子昂——」（『中唐文學會報』第八號、二〇〇一年、以下、別稿と稱す）で中唐に至るこの文學者への批評の變遷をたどった。そこで結論は、次の三點に要約される。

一、陳子昂への好評價は、死後速やかに起こり、盛・中唐期を通し、高い水準が維持された。それらの根底には、彼の儒教に根差した思想、その表現である詩文に對する共感が見られる。

二、陳子昂を唐代に於ける文學改革の先達とする考え方を詩文の上で示した人々の中には李華、蕭穎士、獨孤及、梁肅、韓柳元白、皇甫湜ら古文復興運動の擔い手

たちが多く含まれる。

三、これら後代の陳子昂に對する捉え方は、概ね彼の親友だつた盧藏用の影響下にある。

『陳伯玉文集』^①（以下、本集と稱す）は卷首に「陳伯玉文集序」、卷十附録に「陳氏別傳」、「黃門侍郎盧藏用祭陳公文」（以下、各々「盧序」、「別傳」、「祭文」と稱す）を収めている。いずれも盧藏用の手に成るこれら三編の中、「盧序」が、唐代の文章で引かれた例を擧げておく。

盧黃門云く、陳拾遺は頽波を横制して、天下の質文翁然として一變す。今朝の詩體に至りて尙お梁陳宮掖の風有り。公に至りて大いに變じ地を掃い併せて盡く。『李太白文集』卷一・李陽冰「草堂集序」である。ここでは陳子昂によつて始められた詩文の革新を、李白（公）が完成したと主張する爲に「盧序」（傍線筆者、以下同じ）を引いている。

評に曰く、盧黃門の序 賈誼、司馬遷は禮樂を憲章し、老成の風有りと評し、長卿、子雲は王公大人の言、流辭に溺すと讓む。又た云く、道喪われて五百年に

して陳君有る乎。（中略）此の序 或いは未だ湮淪せざれば、千載の下、當に識者有りて、掌を撫つ無きを得べけん乎。

皎然「詩式」より、卷三「論盧藏用陳子昂集序」を擧げた。そのいささか誇大な陳子昂への贊辭を引いて、皎然は「盧序」の存在自體を容認し難いといわんばかりの口吻を漏らす。

盧黃門の陳拾遺を序する也、而して道喪われて五百歲にして陳君を得、頽波を激昂するが若しと云う。過正に害無しと雖も、其の中論を權すれば、亦た厚誣に傷わざらんや。

引用文は『顏魯公文集』卷十二「尚書刑部侍郎贈尚書右僕射孫逖文公集序」、顏眞卿による孫逖集の序である。やはり先に見た「詩式」と同じ「盧序」の一節を引き、不満を述べる。

陳子昂の死から一世紀に満たない期間で、「盧序」が普及する有様は、以上の擧例からも窺える筈だ。李陽冰、皎然、顏眞卿は贊否の別こそあれ、いずれも「盧序」を引い

て、陳子昂に何らかの評価を下した。これらは明確な例のみで、直接、名前を出さずとも、盧藏用の影響を受けた例は他にも存在しよう。いずれにせよ中唐期へと続く陳子昂評は、盧藏用の目を通したその人物像に基づく。特に陳子昂を文學の改革者と位置付けつつ、彼自身の文論といえる作品を唐人たちが全く挙げていないという事實は、極めて興味深い^③。現存する唐代の文獻だけに於いても「盧序」が數度、引用されている事象は、これと著しい好對照を成す。小論の目的は、盧藏用が抱いた文學觀、彼による陳子昂の形象化、その源流、後代に對する影響の檢證にある。この問題について、先行研究は少なく、別稿でもあまり深く觸れられなかった。陳子昂が唐代でも有數の高い評價を受ける詩人となり得た理由を考察するに當たり、傳記作者且つ最初の批評家たる盧藏用が有した見解への正確な認識は不可欠だと考へる。

別稿との重複は極力、避けるように努めた。だが中には、そこでの論旨を繰り返した箇所も存在する。行論の必要上、已むを得なかつた仕儀として、諒恕を請う次第である。

詩人と傳記作者（永田）

二 盧藏用と彼による陳子昂集の編纂及び流傳

まず『舊唐書』卷九十四、『新唐書』卷一百二十三の本傳により、盧藏用の經歷を略記しておく^④。盧藏用、進士となるも任官できずに隱棲、陳子昂らと交わつた。長安中、官に就いて以後、高官を歷任するが、玄宗が反對派を倒した際、その一員として流刑になる。後に地方官として再起用されるが、在職のまま逝去した。無官だつた時期も、權力との接觸を求め、武則天の行幸に合わせて、高山に向かつたので「隨駕隱士」と稱された。『譚賓錄』（『太平廣記』卷二百四十「盧藏用」）は陳子昂らとの交友、高位に在つての奢侈潛上を述べ、更に彼が「假隱」と評されたと傳える。そこには隱逸を賣り物にして、官職を得た生き様への非難が含まれていよう。榮達して後、嘗て隱れた終南山の偉容に感嘆すると、司馬承禎に「仕宦捷徑」と擲揄される^⑤。『大唐新語』卷十「隱逸」等、人格への評價は芳しくない。盧藏用は中宗（武則天の後を承け重祚）期には、宮廷詩壇の一員でもあり、公宴での應制詩が複數、現存する。『新

唐書」卷二百二「文藝傳中・蕭穎士」には、「當世に許可する所の者は、陳子昂、富嘉謨、盧藏用の文辭、董南事、孔述容の博學而已」という蕭穎士の見解が記される。古文家・蕭穎士（七〇九／一七六〇）から陳子昂と同様、盧藏用も文章家として認められていた様子がこより窺える。

「盧序」（小論第三章での後段）、「別傳」（同じく第四章での第六段）には盧藏用が陳子昂の遺文十卷を纏めた旨の記載がある。従って兩文の執筆時期確定は陳子昂集の編纂期間特定にも繋がる譯で、以下、この問題について考える。

「別傳」第六段には、陳子昂の友人の名が、それぞれ官銜を帯びた形で、列擧される。韓理洲氏はここに見える官職に各人が在任した年代によって、「別傳」は七〇〇年後半に書かれた文章であると推測しておられる。^⑥

一方、「盧序」の執筆年代については、末尾の「黃門侍郎盧藏用撰」という署名が決め手となろうか。盧藏用の黃門侍郎在任は、七一〇年から翌年乃至翌々年までと推測される。黃門侍郎が、陳子昂集完成時に於ける編者の地位ならば、その時期はこの數年以内と限定できる。

實は『文苑英華』（以下『英華』と略）卷七百、「唐文粹」卷九十二所收の「盧序」は「黃門侍郎盧藏用撰」の句を缺く。韓理洲氏は、これを根據に本集（明版）に見える「黃門侍郎」の官銜は、後人の附加で「盧序」の執筆時期を考える手掛かりにはならないとされる。^⑦確かに北宋の總集が收める「盧序」に無い以上、この署名に絶対の信は置けない。但し陳子昂集の編纂が「別傳」が著されたであろう七〇〇年頃に終了した譯ではないと示す傍證は存在する。

本集卷三「爲豐國夫人慶皇太子誕生表」が、それである。これは内容より皇帝（睿宗）の男子誕生を祝い、皇太后（武則天）に奉られた賀表と思われる。陳子昂の生前、誕生と同時に太子となった皇子はいない。標題の皇太子は執筆時ではなく、後から遡っての呼稱と考えられる。武則天、睿宗が皇太后、皇帝だった時期に生まれた點から、その皇子は李隆基、即ち後の玄宗である可能性が高い。玄宗が太子だったのは七一〇年から七一二年まで、これは盧藏用の黃門侍郎在任期間と重なる。「皇太子」が盧藏用の加筆ならば、陳子昂集の補正はこの時期まで續いていた筈だ。

『舊唐書』卷四十七「經籍志」下「丁部集錄・別集類」には、「陳子昂集十卷」という著録がある。「經籍志」は、七二一年に成った『群書四部錄』を編者の一人が節略した『古今書錄』に基づく。また七二七年成書の『初學記』は卷二十二「武部・旌旗・祭文」に「禡牙文」（本集卷七）、卷二十六「器物部・脯・賦」に「塵尾賦」（同卷一）を引用する。これら勅撰書の記載は、開元期（七一三～四一）に陳子昂集が宮中にも藏せられていた事實を示唆しよう。^⑧

時代は下り晩唐期までに陳子昂集が廣く流布していたと示す例證を次に挙げる。このうち崔碣の著した墓誌銘を除く残りの三者は、その別集が十卷より成っていたであろう事實を想像させる。

○敦煌文書・陳子昂の詩文を収める敦煌寫本は數種、發見されているが、中でも『故陳子昂集』と題する伯三三九〇號（卷八の途中から卷十までが残存する。以下、敦煌本と稱す）所收の作品は現行の本集該當部分と内容・配列の順序が完全に一致し、また末尾には「別傳」をも收録している。

詩人と傳記作者（永田）

○崔碣「盧端公逢時妻李氏墓銘」（咸通四年・八六三・五月廿九日）・崔璩（碑主の五代の祖）が司馬承禎、趙貞固（小論第四章に擧げる「挽詩」の標題に見える趙之）、盧藏用と親友だった旨の記事が「陳公子昂集序」に見えるとある。

○劉蛻「覽陳拾遺文集」^⑩「郟中 好事の人、家に藏す君が十軸」（『永樂大典』卷三千一百三十四「九眞・陳」所引「潼川志」、劉蛻の名の前に「東川觀察判官長沙」とある）

○『日本國見在書目錄』（九世紀末の成書か）「別集家」に「陳子昂集十卷」が著録される。

これら本章で擧げた事柄を、總合して考えれば、結論として以下の三點が指摘できる。

- 一、盧藏用による陳子昂集の編纂は、「別傳」が書かれたと思しい七〇〇年頃には進められていた。
- 二、標題の修正といった作業も含めれば、それは七一〇乃至七二二年頃まで續けられていた可能性がある。
- 三、盛唐期、宮中に入つて後、遅くとも唐末までに敦煌や日本に至る廣範圍に陳子昂集は傳播した。それに

は高官且つ文人としてもある程度は認められていた
盧藏用の知名度も関わってくるかもしれない。

唐代の陳子昂集が「別傳」をも収めていた事實は、敦煌本の存在により立證される。當時の陳子昂集が、同じ著者による「盧序」をも包含していた可能性は高い。この假定が正しければ、陳子昂集の流傳は、同時に「別傳」、「盧序」の廣まりを意味する。小論第一章で見た唐人による「盧序」引用の背景には、陳子昂集の速やか且つ廣範な普及という事象が存在したのではなからうか。

三 「盧序」の文學觀

——「宋書」「謝靈運傳」論との比較を通して——

以下、盧藏用の陳子昂に対する評價、更には彼自身が抱いていた文學觀について考える。本章では「盧序」を手掛かりとして、この問題に關して見ていきたい。「盧序」には、吳企明氏による注解がある（孫望、郁賢皓兩氏主編「唐代文選」〔江蘇古籍出版社 一九九四年〕上に收める）。ここでは吳氏に従つて、「盧序」を前、中、後の三段に分ける。

昔 孔宣父 天縱の才を以て、衛自り魯に返り、乃ち詩書を刪し、易道を述べ、而して春秋を作り、數千百年、文章は粲然として觀る可き者也。孔子歿し二百年にして騷人作り、是に於いて婉麗浮侈の法行わる焉。漢興りて二百年、賈誼、馬遷 之が傑と爲り、禮樂を憲章して、老成人の風有り。長卿、子雲の儔、瑰詭萬變、亦た奇特の士也。惜しむらくは其の王公大人の言、流辭に溺して顧みず。其の後 班、張、崔、蔡、曹、劉、潘、陸 波に隨いて作る。大雅足らずと雖も、然れども其の遺風餘烈、尙お典刑有り。宋齊已來、蓋し顛頽透逸として、陵類流靡す。徐、庾に至りては、天の將に斯文を喪はんとする也。後進の士、上官儀の若き者、踵を繼ぎて生ず。是に於いて風雅の道 地を掃いて盡く矣。^⑫

孔子による經典編纂を起點とし、彼の死後を儒教精神の退潮期、やがてそれがある人物乃至著述により回復されるという主張は、儒家の史觀として漢代以降、枚擧に暇無い。後漢・王逸の「楚辭章句敘」はその最も早い例である。

敘に曰く、昔者 孔子 叡聖明詰として、天生 群
ならず、經術を定め、詩書を刪し、禮樂を正し、春秋
を制作し、以て後王の法と爲す（『楚辭補注』「離騷」

附）

引用部分に續き、孔子没後の有様を王逸は「則大義乖而
微言絶」と記す。かかる狀況下、屈原は「詩人之義（詩
經の精華）」に依つて、「離騷」を著したと彼はいう。

『楚辭』の注釋者として、當然ながら屈原を儒教精神の
繼承者と見なす王逸に對し、むしろ盧藏用は、「騷人」こ
そ「婉麗浮侈之法」を廣めた張本人とする。彼にとつて儒
の傳統を再興したのは、前漢の文學者たちだった譯で、そ
の見解は「漢興二百年」以降の一節に表れている。

ただ詩書・春秋を文學の始まりとし、自らが信奉する文
人により、一旦は失われた儒の傳統が復興されるといふ圖
式について、「盧序」は明らかに「楚辭章句敘」を踏襲し
ている。何より孔子の教えを受け繼いだと考える文學を高
位に置く價值基準に關して、前者は後者を繼承する。

以下、「盧序」は賈誼、司馬遷、司馬相如（長卿）、揚雄

詩人と傳記作者（永田）

（子雲）に言及する。禮樂を（著述の）基盤とした前二者に
比べ、後二者への扱いは低いが、彼ら四人は概ね高く評價
される。續く「班（固）、張（衡）、崔（駟）、蔡（邕）、曹
（植）、劉（禎）、潘（岳）、陸（機）」は、「大雅」（儒教精神
の意）が足りないとしつつ、なお容認される。賈誼らを
褒めた「有老成人之風」、班固ら後漢より西晉に至る文人
を評した「尚有典刑」は、『毛詩』「大雅・蕩」の「雖無老
成人、尚有典刑」（伊尹の如き名臣は既に亡いが、その遺令は
なお存するという意）による。前漢までの「遺風餘烈」を、
盧藏用もこの時期の文學には、認めている譯である。

續いて「宋齊已來（『唐文粹』作「宋齊之末」）の頽廢し
た文學が、攻撃を受ける。徐陵・庾信より上官儀に至る過
程は「天之將喪斯文也」（『論語』「子罕」）と表現される。

易に曰く、物は以て否に終る可からず、故に之を受
くるに泰を以てす。道喪われて五百歳にして陳君を得。
君 諱は子昂、字は伯玉、蜀人也。江漢に崛起し、函
夏を虎視し、千古に卓立し、頽波を横制し、天下 翕
然として、質文一變す。夫の岷峨の精、巫廬の靈に非

ざれば、則ち何を以つてか此を生ぜんや。故に諫諍の辭有り、則ち爲政の先也。昭夷の碣、則ち議論の當也。國瘍の文、則ち大雅の怨也。徐君の議、則ち刑禮の中也。感激頓挫、微顯れ幽を闡し、變化の朕しを見し、以て天人の際に接するに庶幾ちかき者に至りては、則ち感遇の篇存す焉。其の逸足駸駸、方に將に扶搖を搏ちて泰清を凌ぎ、遺風を獵りて高岱に薄らんとするを觀る。吾 其の進むを見るも、未だ其の止まるを見ず。惜しむらくは當世に湮厄し、道は時に遇わず、骨を巴山に委せ、年志 俱に夭す。故に其の文 未だ極まらざる也。

中段冒頭で引用される『周易』は、「序卦傳」に基づく。六十四卦は循環して止まず、否卦も泰卦に變化する（兩卦は各々不安定、安定の象徴¹³）。同様に閉塞しきつた詩文の現狀も、やがて打破される運命にあると、これは後で陳子昂による文學の復興を語り出す伏線といえる。「道喪五百歲而得陳君焉」は皎然と顏真卿が、「天下翕然、質文一變」は李陽冰が各々引いた一節、いずれも陳子昂が長期に涉り、

衰微し續けた文學を一氣に變革した様を表現している。

以下、陳子昂の詩文を五つの分野に涉つて個別の作品ごとくに論評する。中でも彼の代表作とされる「感遇」三十八首（本集卷二）には最も多くの言葉を費やす¹⁴。次にその評語を少し詳しく見ておこう。

まず「感激頓挫」は『詩品』卷中「中品・謝朓」條に見える言葉、この「頓挫」とは「抑揚」といった意味である。謝朓が感情を昂揚させながら、詩について高く、また低い調子で論じた態度を實地に見た『詩品』の著者・鍾嶸は、「感激頓挫」の四字で表現したと思しい。

「感激頓挫」と組になる「微顯闡幽」は、『周易』「繫辭下傳」の用語で、「微」細な事柄を「顯」かにし、「幽」闇の事象を「闡」明にするという意味である。事態を發生に先立つて豫測し、現象の背後にある法則性を知る「易」の效用を表現した言葉と考えられる。

「天人之際」は司馬遷が強く惹かれた概念¹⁵、『文選』卷四十一「報任少卿書」で彼は畢生の大作『史記』全書の執筆はそれを「以て究めんと欲した」爲だと記している。歴

史の敘述によって、天道と人の運命との關連を明らかにしようとする司馬遷の意圖をこの言葉は象徴している。

これら古典の表現を用いて、盧藏用は「感遇」という連作詩を總括している。心を昂ぶらせた上で高低兩様の調べにより（感激頓挫）、事柄を豫め察知してそれに潛む自然の理を體得し（微顯闡幽）、人には通常、捉え難い「變化之朕」を現し、天命と人間の關係（天人之際）に迫ろうとする、「盧序」の「感遇」評はかくの如く解釋できる。現在に至るまで、大筋では變わらない「感遇」への解釋は、この時点で既に方向付けられていたといえる。

嗚呼、聰明精粹にして淪剝し、貪叨桀驚は以て顯榮す。天なる乎、天なる乎。吾 始め未だ夫の天を知らず焉。昔^⑮ 常に余と忘形の契り有り、四海の内、一人なる而已。良友歿す矣、天 其れ予を喪す。合わせて其の遺文の存す可きを探り、焉に編して之を次し、凡そ十卷。恨むらくは作者に逢わず、詩人の什に列するを得ず。悲しい夫。故に粗ば文の變を論じて之が序と爲す。王霸の才、卓犖の行に至りては、則ち之を別傳

詩人と傳記作者（永田）

に存し、以て終篇に繼ぐと云う耳。黃門侍郎盧藏用撰す。

後段では、志を抱きつつ不運のうちに夭折した陳子昂を悼む言葉が續く。「天其喪予」という表現は、愛弟子の顔回に先立たれた孔子の悲嘆（論語）「顔淵」を意識する。弛まず努力しながら道半ばで斃れた陳子昂への哀悼は、中段の終盤にも見えた。後段で盧藏用は、彼の早世に對する天の責任にまで思いを致す。時代こそ異なれ「作者」、「詩人」（詩經）に收める詩の作り手）にも匹敵し得るといふ贊辭を以て、「盧序」の陳子昂に對する評價は幕を閉じる。

吳企明氏の注釋で、かなり明らかにされているが、それ以外にも「盧序」は數多くの先行文獻を踏まえる。その中には六朝以前だけでなく、盧藏用により近い隋唐の典籍を個別の表現に至るまで露骨に利用した例も含まれる。^⑯ただ權威ある作品の巧みな模倣を良しとする傳統的な文章觀に従えば、「盧序」も亦た簡古清壯、唐初の文人の及ぶ所に非ず」（『直齋書錄解題』卷十六「別集類」上『陳拾遺集』に見える南宋・陳振孫の評語）と高い評價を下すのも、可能な譯であ

る。唐人が「盧序」を屢々取り上げた背景には、こういった文章としての聲價が關わっているのかもしれない。

「盧序」の執筆を盧藏用は、後段の末尾近くで「故粗論文之（『英華』、『唐文粹』は「之」を缺く）變而爲之序」と解説する。前・中段の全てを用いて孔子から陳子昂に至る詩文の變容を記す構成が、この言葉を実證している。盧藏用自身の意識によれば「盧序」は、一種の文學史的敘述だったといえる。過去に於ける「文之變」を回顧した文章として、「盧序」がもつ意義を以下、考えていく。

初唐期、盛んに著され始めた文學史的敘述は、一定数が現存する^⑩。それらの中でも王勃「上吏部裴侍郎啓」、楊炯「王勃集序」（各自『英華』卷六百五十六、六百九十九）は、過去の文學に對する苛烈な排撃性によつて名高い。前者は詩賦を以て官吏を登用する制度に疑問を呈する爲、後者は王勃の文業を賞賛すべく相對的に他の文人を抑えるといった風に執筆の目的は異なる。ただ兩者共に漢魏六朝の文學者を非難する口調はかなり嚴しい。その意味で「盧序」が「宋齊已來」の墮落した詩文を批判したのも、決して目新

しい態度ではない。そこに盧藏用の獨自性は見出し難い。

むしろ「盧序」の特徴は、文學史の時期區分にこそ發揮される。いま前段の「遺風餘烈」という用語を糸口にその問題を考えたい。古代の文學がもつ氣風といった意味で使われるこの言葉は、詩歌史として著名な沈約『宋書』卷六十七「謝靈運傳」論で潘岳、陸機を評して用いられる。

平臺の逸響を綴り、南皮の高韻を採り、遺風餘烈、事は江右に極まる。

『文選』卷五十の李善注によれば平臺、南皮は各々前漢の梁・孝王、魏の文帝が遊んだ土地で、彼らが招いた司馬相如、徐幹・應瑒たち文人の創作活動を象徴する。これら漢魏の流れを汲む文學は、沈約によれば、西晉（江右。長江下流域に南渡して後の東晉に對した言い方）で頂點に達したとされる。語彙の段階だけでなく、潘陸までは「遺風餘烈」が残っていたという認識をも「盧序」は「謝靈運傳」論と共有するが、これは著名な「三變」説と關わる。

「謝靈運傳」論は、文學史を先秦漢魏、晉宋と大きく二つに分ける。沈約自身が言明する「三變」は、うち前半期

の西漢、東漢、曹魏の代表文人を極点とした詩歌の變遷を指す。ただ沈約は後半期をも、三つに細分しており、「盧序」による文學史の區分けは、主にこれと關係している。

晉宋期を沈約は、(i)西晉・元康年間まで、(ii)東晉、(iii)東晉末・義熙年間から劉宋の三段階に分かつ。彼の見解によれば文學史上、(i)は前代から引き繼いだ「遺風餘烈」の殘存期、(ii)は老莊思想を根底に置いた玄言詩が主流となる衰退期、(iii)は謝靈運らを中心とする復興期と概括できる。

これに對して「盧序」による文學史の三區分は(a)經書より潘陸まで、(b)「宋齊已來」、初唐の上官儀たち以前、(c)陳子昂と規定し得る。(a)は各朝代間で盧藏用の評價にも高低はあるが、西晉までの詩文はともかく認容される。(b)は一方的な衰落の過程、(c)はそこから脱却していく時期といえる。三期中、第二期は否定、第三期を執筆者自身の現在乃至近い時代とし、特定の文學者により、第二期での弊風が是正されるという圖式は「謝靈運傳」論と共通する。

さすれば「盧序」は、單なる「謝靈運傳」論の亞流かといえ、それは正しくなからう。沈約が對象としたのは宋

代まで、對して盧藏用は(a)で先秦より潘陸を掉尾とする時代を、(b)でその後、初唐に及ぶ長期間を扱う。もとよりこれは兩者が生きた時代の差による。ただ「盧序」の讀者である唐人から見れば、「盧序」は「謝靈運傳」論と異なり、彼らにとつての現代までも包括した文學史的記述となっているとの觀を抱かせたのではないかと考えられる。

また沈約は、(iii)で殷仲文、謝混、謝靈運、顏延之の名前を擧げる。「謝靈運傳」論は、これら複數名によつて、東晉の玄風は驅逐されたと述べる。史論と個人の集に附された序という違いはあるが、これと對照的に盧藏用は、(c)で文學の流れを變えた功績を全て陳子昂一人に歸している。

如何ぞ五百の數 獨り陳君に歸せん乎。藏用 子昂の爲に一尺の羅を張り、彌天の宇を蓋い、上は曹劉を掩い、下は康樂を遣れんと欲すれども、安んぞ得可けん耶(「詩式」卷三)

「論盧藏用陳子昂集序」中、小論第一章の引用では省略した箇所である。皎然が指摘するとおり、六朝・初唐の約五百年間を文學不毛の時代とした「盧序」の主張は、極端

に過ぎよう。しかしその目的が、次の時期に陳子昂が果たした役割の強調にあつたのは、明らかではあるまいか。

當時に於ける全文学史を對象とする「盧序」の視野は、「謝靈運傳」論の趣旨に倣いつつ、より初唐の現狀に即していた。上昇と下降と陳子昂による再上昇だけで詩文の歴史を總括した手法は、極めて單純明快な文學史の構圖を提示する。「宋齊已來」を完全に否定しつつ、唐代をそこからの回復期とした盧藏用の視座は、現に唐朝の治下で生きる文人たちの好尚に適っていたのではなからうか。

いま「盧序」の文學史觀が、唐人に受容されていた例として、盛・中唐の交を代表する古文家である賈至の「工部侍郎李公（李適、中宗・睿宗兩朝の宮廷詩人）集序」（『英華』卷七百一）を次に擧げよう。この文章は、中に見える李適の子の官名より七六五年頃、書かれたと考えられる。¹⁹⁾

於是仲尼刪詩述易作春秋、而敘帝王之書、三代文章、炳然可觀。洎騷人怨靡、揚馬詭麗、班、張、崔、蔡、曹、劉、潘、陸、揚波扇颺、大變風雅、宋齊梁隋、盪而不返。

この後、「斯文將喪久矣」となった文學が、「傑立當代」の李適により復興された旨の記述が續く。比較の便を考慮して、「盧序」の關連する部分をやはり原文で引いておく。

孔宣父……乃刪詩書、述易道、而作春秋……文章粲然可觀者也……騷人作……婉麗浮侈之法行焉……長卿、子雲之儔、瑰詭萬變……溺於流辭而不顧……班、張、崔、蔡、曹、劉、潘、陸、隨波而作。雖大雅不足……宋齊已來……天之將喪斯文也……卓立千古……。

經書の編述より騷人、揚馬への批判、宋齊に始まる文學の廢退、對象は異なるが初唐の文人が詩文の衰微を回復したとする見解から、細部の語句に至るまで、賈至が「盧序」を踏襲した跡は歴然としている。殊に班固以下、列擧される文學者名が、偶然の一致とは思えない。

漢魏・西晉を宋齊の上位に置く、いわば古きを良しとした盧藏用の觀點は、賈至らの後を繼ぐ文學上の復古主義者、中唐の古文家たちの掲げた理念とも相通じる側面をもつ。南宋・劉克莊『後村先生大全集』卷一百七十六「詩話・後集」は、「盧序」中段の「崛起江漢……質文一變」や

「感激頓挫……以接乎天人之際」という部分を次のように批評する（單行本の『後村詩話』では後集卷二に見える）。

韓柳 未だ出でざるの前 此の論を爲す。亦た之を
知言と謂う可し矣。^②

賈至と同時代の獨孤及、やや遅れる梁肅、彼らに續く韓柳元白たち古文の提唱者が、文學上の復古に關して、陳子昂を自らの先達と仰いでいた状況は、別稿第四章及び第一章の中で既に詳論した。唐代に於ける古文復興の過程については「陳子昂——（賈至ら早期の古文家）——韓愈、柳宗元」という圖式によって總括される場合が多い。北宋中期に文體の改革が一應、完結を見て以後、このような系譜の觀念は、より一般に浸透していったのではないかと思われる。劉克莊の指摘によれば、古文家の理論に關する系譜は「（陳子昂を題材に文學を論じた）盧藏用——韓柳」と圖式化できよう。「工部侍郎李公集序」が「盧序」を祖述した様は、先に見た。陳子昂自身の作品に比べ盧藏用の言説が顧みられなくなつた南宋期、古文復興という流れの中に於けるその文學觀に對する劉克莊の着眼は、唐代の古文家たち自身

詩人と傳記作者（永田）

が抱いていた意識と合わせて考えると興味深い。

四 「別傳」による陳子昂の形象化

傳記という性質上、「別傳」中に盧藏用自身の主張は、「盧序」ほど露には見られない。だが陳子昂の生涯に關する現存最古の纏まった記述として、「別傳」の價値は無視できまい。後世の陳子昂評を考える上でも、盧藏用による彼の形象化は分析しておかなければならない。

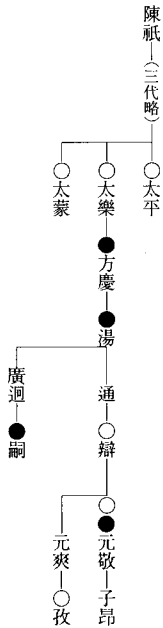
「別傳」には笈久美子氏による詳細な譯注がある（小川環樹氏編『唐代の詩人——その傳記——』大修館書店 一九七五年）所收）。詳しくはそちらに譲り、ここでは必要な指摘のみ行いたい。便宜上、七段に分けた上で、「別傳」の内容を概観する。なお「別傳」は本集、敦煌本以外に『英華』卷七百八十三にも收め、これら三者間で相互に異同がある。

(I) 祖先についての記述

陳子昂、字は伯玉、梓州射洪縣の人也。本と潁州に居る。四世の祖方慶、墨翟の祕書を得、武東山に隱る。

子孫 焉に家す。世よ豪族爲り。父元敬、瑰偉倜儻、年二十、豪俠を以て聞ゆ。屬たま郷人 饑に阻むに、一朝萬鍾の粟を散じて報いを求めず。是に於て遠近の之に歸すること龜魚の淵に赴くが若き也。明經を以て第に擢んでられ、文林郎を授けらる。因りて墳籍を究覽す。家園に居りて以て其の志を求む。地骨を餌し雲膏を鍊すること四十餘年なり。

第一段では、まず陳子昂の祖先の事跡が話題となる。これらの記述は、概ね陳子昂自身による本集卷五「梓州射洪縣武東山故居土陳君碑」、卷六「我府君有周居士文林郎陳公墓誌文」、「堂弟孜墓誌銘」(以下、各々碑主の名により「陳嗣」、「陳元敬」、「陳孜」と稱す)を材料とする。以上、三編の墓誌銘に基づいて作成した陳家の系圖を次に掲げておく。



射洪陳氏は、蜀漢の尙書令だった陳祇を開祖とする。蜀

の滅亡後、彼の子孫は出仕せず、地元の有力者と涪南で新城郡を興し、代々郡長を務めた。梁代、陳太樂ら兄弟が地方官となるも、陳湯が梁末の騷亂で官を離れて後、陳元敬(彼も實際には任官せず)まで一族から官僚は出ていない。

「陳嗣」、「陳元敬」、「陳孜」を通讀すると、「豪傑」やそれに類する言葉で、性格を形容される族人がまず目に付く。前掲の家系圖で名前に○を冠した人物がそれである。

「陳孜」には「豪英雄秀」の衰えを危ぶむ伯父(陳元敬か)が、陳孜を見て「吾が家道を慰む」と評したとある。陳氏自身、「豪」を自らの家風と認めていた様が窺える。

今一つ三編の墓誌銘を見て、印象に残るのは隱者として描かれる親族の存在である。こちらは系圖中に●を付したが、「好道」、「避世」等の傾向をもつ祖先も陳家には乏しくない。

陳氏に傳わる隱逸の傳統は、「陳孜」及び「陳元敬」によれば陳子昂にとって五(「別傳」の四は誤り)世の祖に當たり「墨子五行祕書」、「白虎七變法」を入手した陳方慶に始まる。②「別傳」が「墨翟祕書」と呼ぶこれらの書物につ

いては、「抱朴子」「内篇・遐覽」に言及がある。

變化の術で偉大なものは墨子五行記^①だけで、もと五卷有った。むかし劉君安^②がまだ仙去しなかつた時、その要旨を寫し取つて、一卷とした。その法は薬と符を用いて、飛行、隱形を行つたり、様々な變身を可能にし、杖を林にし、種を蒔けばすぐに實が生り、地面を河にし、土塊を山とし、居ながらにして食物を取り寄せ、雲や火をおこし、何でも思いのままにできる。^③

以上がその大意である。省略したが、この後に紹介が見える「白虎七變法」も藥物を利用した道術だと考えられる。ともかくここにいう「墨子」は、墨家の開祖としての墨子ではない。むしろそれは道家、より具體的には飛行、隱形、變化を目的とする神仙思想中の存在といえよう。

方術の歴史に於ける墨子の位置は、いま詳らかにし難い。ただ陳子昂の祖先が、單なる老莊哲學のみならず服藥、符術をも含む登仙法の影響で隱棲を行つた可能性は否定できない。いずれにせよ「豪」同様、隱逸という家庭の傳統は、以下「別傳」の描く陳子昂像にも反映されている。

詩人と傳記作者（永田）

(II) 本人の少年時代から進士及第まで

嗣子の子昂、奇傑 人に過ぐ。姿狀嶽立す。始め豪家の子を以て俠を馳せ氣を使い、年十七八に至るも未だ書を知らず。嘗て博徒に従いて郷學に入り、慨然として志を立つ。因りて門客を謝絶し、墳典に專精す。數年の間、經史百家、該覽せざる罔し。尤も善く文を屬る。雅より相如、子雲の風骨有り。初めて詩を爲るに、幽人の王適、見て驚きて曰く、此の子 必ず文宗たらん矣と。年二十一、始めて東のかた咸京に入り、太學に遊ぶ。羣公に歴抵す。都邑 靡然として屬目す。是由り遠近の稱する所と爲り、籍甚す。進士の對策を以て高く第す。

第二段は、任俠より學問に轉向し上京後、次第に名聲を得て、遂には優秀な成績で進士に及第する過程を記す。博徒とも交わる無賴の生活は、家に傳わる「豪」の氣風とも関わつていよう。「雅有相如、子雲之風骨」とは、同じ四川出身の文學者・司馬相如、揚雄に因む表現である。僅か

な期間で王適という理解者から、絶贊を得る程の詩を作るまでに至つたと「別傳」は陳子昂の文才を強調する。

(III) 武則天による登用と上書の黙殺

屬たま唐の高宗大帝 洛陽宮に崩す。靈駕 將に西に歸らんとす。子昂 乃ち書を闕下に獻ず。時に皇太后を以て攝に居る。其の書を覽て之を壯とし、召見して狀を問う。子昂 貌寢^{みたく}く援寡なし。然れども王霸の大略、君臣の際を言いて甚だ慷慨す焉。上 其の言を壯とすれども、未だ深くは知らざる也。乃ち勅して曰く、梓州の人 陳子昂、地籍英靈にして、文は偉曄を稱す。麟臺正字を拜す。時に洛中 其の書を傳寫し、市肆閭巷、吟諷相屬く。乃ち轉た相貨鬻するに至り、遠邇に飛馳す。秩滿つ。常牒に隨い、右衛冑に補せらる。上 數ば召して政事を問う。言 切直多し。書奏は輒ち之を罷む。繼母の憂を以て官を解き、服闋み、右拾遺を拜す。子昂 晩に黄老の言を愛し、尤も易象を耽味し、往往 精詣す。職に在りて默然と樂し

まず、私かに掛冠の意有り。

洛陽で崩御した高宗の靈柩を首都・長安へは運ばず、地で埋葬するよう主張した上書の奉呈で、第三段は始まる。結局、この獻策は受け入れられなかった。但しその内容は、皇太后として輔政の任に在つた武則天の好評價を得、麟臺正字に陳子昂は敍される。諫官に就任し、また盧藏用が幾分か誇張しているにせよ文章は廣範に傳播する等、「別傳」が描く陳子昂の人生中、最も幸福な時期である。

ところがこの後、一轉して連續する上書の不採用で失意の境遇に陥る様子が描かれる。陳子昂の上奏文は本集の卷八、九に收録される。そこに見える儒教道德に根差す政論が、史上空前の女帝という地位へ突き進む武則天の方針と相容れず、「書奏輒罷之」となつたのは當然だった。以下、繼母の服喪による歸郷を挟み、官途に嫌氣がさしていく姿が、描寫されている。末尾近くに記す黄老に對する愛好は、隱逸者を出してきた陳氏の家系とも關連するかと思う。

(IV) 契丹征討への従軍

屬たま契丹 營州を以て叛す。建安郡王の攸宜 親しく戎律を總べ、臺閣の英妙 皆な置きて軍麾に在り。時に勅して子昂は帷幕に參謀たり。軍 漁陽に次す。前軍の王孝傑等 相次いで陥没し、三軍震懼す。子昂 諫を進めて曰く、(中略) 建安方に闘士を求む。子昂 素と是れ書生なるを以て、謝して容れず。子昂 體弱く疾多し。忠義に感激し、常に身を奮い以て國士に答えんと欲す。自ら以えらく官 近侍に在り、又た軍謀に參預す、危を見て身を苟容に惜しむ可からず。他日 又た諫を進む。言 甚だ切至なり。建安 之を謝絶す。乃ち署するに軍曹を以てす。子昂 合わざるを知る。因りて箝黙して列を下る。但だ掌書記を兼ねる而已。薊北樓に登るに因りて、昔の樂生燕昭の事に感じ、詩數首を賦す。乃ち泫然と涕して歌いて曰く、前に古人を見ず、後に來者を見ず、天地の悠悠たるを念い、獨り愴然として涕下る。時人 知らざる莫き也。²³

詩人と傳記作者(永田)

建安郡王・武攸宜(武則天の従兄弟の子)の配下として陳子昂は、契丹討伐に参加する。省略した部分は、先鋒部隊の敗戦で、征討軍が恐慌状態に陥った際に爲された彼の諫言である。大軍で敵を威壓し、規律を嚴格にして速戦せよ、しからば契丹など恐れるに足りない、但し先の敗北を教訓とせず、また軍内の改革を行わずに、時間のみ費やせば、再戦しても勝てないという主張が、そこには展開する。武攸宜はこれを受け入れず、獻策を繰り返す陳子昂を「參謀」から「掌書記」(文書係)兼任の「軍曹」(事務官)に左遷した。全體としてこの一節は、上官の無策振りと部下の唱える正論とが、鮮明に對比して描かれる構成をとる。

武攸宜の無理解で沈黙した陳子昂は、戰國・燕の古都たる薊で、詩作に勵む。樂毅(樂生)、昭王らこの土地に縁の人物を詠んだ「薊丘覽古盧居士藏用」(本集卷二)は、題名どおり盧藏用に送った七首の連作詩である。樂毅による戰勝の背景には、燕の昭王の彼に對する信賴が存在した。樂毅、昭王の故事に感慨を催したとする記述は、彼らとは逆に武則天、武攸宜ら上位者との關係に恵まれなかつた陳

子昂の不遇を一層、際立たせる。これに續く「前不見古人」以下、四句より成っている「登幽州臺歌」は、次に引く『楚辭補注』「遠遊」の一節を明らかに踏まえる。

惟れ天地の窮まり無く兮、人生の長く勤むるを哀しむ。往者は余及ばず兮、來者は吾聞かず。

王逸の序によれば放逐後の屈原が作ったといふこの作品を用語、また自己の苦衷を訴える對象すらいはないとする主題の両面から、「登幽州臺歌」は模倣している。永遠の存在である自然と限りある時間しかもたない人間、時空の壮大さと卑小な人の社會を對比した絶唱を以て、契丹遠征に關係した記述は終わる。同時にそれは、陳子昂の官人生活の終焉でもあつた。

(V) 退官歸郷と死

軍罷むに及び、父の老いたるを以て、表して職を罷め歸り侍せんことを乞う。天子之を優で、帶官取給にして歸るを聽く。遂に射洪の西山に茅宇數十間を構え、樹を種え藥を採り以て養を爲す。國史の蕪雜を恨

む。乃ち漢の孝武の後自り以て唐に迄び、後史記と爲す。綱紀粗ぼ立ち、筆削未だ終らざるに、文林府君の憂に鍾う。其の書中ごろに廢せらる。子昂性至孝、哀號柴毀、氣息逮ばず。屬たま本縣の令段簡貪暴殘忍なり。其の家に財有るを聞き、乃ち文法に附會して、將に之を害せんと欲す。子昂荒懼し、家人をして錢二十萬を納めしむ。而れども簡の意未だ已まず。數ば輿曳して吏に就かしむ。子昂素と羸疾、又た哀毀し、杖して起つ能わず。外に苛政迫る。自ら力氣を度るに、恐らく全かる能わず。因りて著に命じ自ら筮す。卦成る。仰ぎて號びて曰く、天命祐けず、吾其れ死せん矣。是に於いて遂に絶つ、年四十二なり。

第五段は『後史記』と題する未完に終わった史書の編纂、また「種樹採藥」と形容される陳子昂の晩年を記す。少年期の「馳俠馳氣」(第二段)、壯年期の「感激忠義」(第四段)と對照的な射洪西山での引退生活は、父(文林府君)の死と地元の縣令による迫害で終わりを告げる。「別傳」

は彼の最期を運命を豫見した上での憤死として悲劇的に描く。

(VI) 人物及び交友と作品の傳存

子昂 天下の大名有り、而して以て人に矜らず。剛果強毅、而して未だ嘗て物に忤らわず。施しを好み財を輕んじ、而して報を求めず。性 酒を飲まず。情に契り理に會するに至りては、兀然として酔う。工みに文を爲り、而して作るを好まず。其の立言措意、王霸の大略に在る而已。時人 之を知らざる也。尤も交友の分を重んじ、意氣 一たび合えば、白刃と雖も奪う可からざる也。友人趙貞固、鳳閣舍人陸餘慶、殿中侍御史畢構、監察御史王無競、亳州長史房融、右史崔泰之、處士太原の郭襲微、道人史懷一、皆な歲寒の交を篤くす。藏用と遊ぶこと最も久し。其の論に飽く。故に其の事 得て述ぶる可き也。其の文章散落し、多く之を人口に得。今 存する所の者十卷。嘗て江上丈人論を著し、磅礴機化を將て、而して造物者と遊ぶ。家

詩人と傳記作者（永田）

難に遭いて之を亡う。

第六段では陳子昂の名聲、高潔な人格、酒と文や友達に對する姿勢、交友關係、盧藏用の遺文收集が話題となる。

「好施輕財、而不求報」との性格は、第一段の父・陳元敬による地元民救恤という「豪俠」の行爲にも通じる。本段で興味深いのは、散佚した作品への言及である。この「江上丈人論」という標題は、『呂氏春秋』『孟冬紀・異寶』の逸話を連想させる。いまその梗概を次に舉げておこう。

亡命途次の五員（伍子胥）は、「江上」で船を操り漁をする「丈人」に頼んで、川を渡してもらう。渡り終えた後、五員は名を尋ねるが、丈人は答えない。所持していた千金の劍を與えようとする五員に、丈人は「荆國の法によれば、五員を捕らえた者は、高い位と莫大な褒美が得られる。千金の劍が何になろうか（報酬目當てで助けた譯ではない）」と答える。後に五員は丈人の行方を捜すが見つからず、そこで食事の度に「江上の丈人、天地は至大矣、至來矣、將に奚ぞ爲す有らざらんとする也。而して以て爲す無し。爲奚て以て之を爲す無く、名は得て聞く可からず、身は得て見

る可からず、其れ惟れ江上の丈人乎」と彼を言ほいだ。

賞金首の五員を彼と知りつつ渡河させ、謝禮も受け取らず、名も伏せたまま、姿を消す「江上之丈人」^②の融通無碍な態度が語られる。「江上丈人論」の詳細は最早、分らない。しかし「將磅礴機化、而與造物者遊」という「別傳」の評語から、臆氣ではあるが作品の方向性は推測できよう。

即ち「磅礴」(磅礴に同じ)は萬物を混同して分け隔てが無い様、「與造物者遊」は創造主と心で交わる道家にとつて理想の精神状態、各々『莊子』「内篇・逍遙遊」、「雜篇・天下」の表現である。これらは先に見た『呂氏春秋』に於ける「江上之丈人」の生き様と重なつていよう。標題、「別傳」の評語から「江上丈人論」は、老莊思想の雰圍氣が濃厚な文章だつたと考えて、間違ひあるまい。

(VII) 馬擇の談話と贊

荆州倉曹 槐里の馬擇曰く、擇 昔 父の友 王適
に從ひ陳君を獲。欣然として我が幼齡を忘る矣。榆關

の役に君は其の謀を籌す。戎安 年を累ね、晤語に接せず。聖曆の初、君 舊山に歸寧し、掛冠の志有り。予 役を懐かしみ南に遊ぶ。遣いて茲に歡び甚だし。幽林清泉、醉歌絃詠す。周覽 計る所、倏として岷峨に偏し。予旋りて未だ幾ばくならず、陳君 將に化せんとす。悲しい夫、言絶え道冥し。杳然 喪わるるが若きの幾なり。延陵も心に許し、而れども彼 已に亡し。天 斯文を喪はず、我が恨み 何にか及ばんや。君の故人 范陽の盧藏用、其の遺文を集め、序傳を爲る。識者 其の實録を稱う。^③嗚呼、陳君 爲に亡びず矣。遂に贊を爲りて曰く、岷山より江を導き、回りに萬里に薄る。浩瀚鴻浴、東は滄海に注ぐ。靈光氛氳、上りて紫雲に薄る。其の瑰寶の育む所は、則ち異人を生ず。於戲、才は兼濟す可きに、屈して伸びず。行は神明に通ずるに、庸塵に困しむ。子曰く、道の將に喪われんとする也、命なる矣夫。

第七段は馬擇の回想と盧藏用による贊から成る。終盤で第三者の證言を引くのは「別傳」の「實録」性を高め、ま

た陳子昂の高邁な人柄と優れた能力を今一度、讀者に印象付ける意圖による。『天喪斯文』という言い回しは、『盧序』前段と同じく『論語』「子罕」を踏まえる。『盧序』が類似の表現で陳子昂登場以前の文學を酷評したのは、既に見たとおりである。ここでは贊末尾の『論語』「憲問」に基づく「道之將喪也、命矣夫」と同様、やや陳腐と思える典故を用いながら、彼の偉大さ、また「道」の喪失をも同時に意味したその死への哀悼を強調する効果をもつ。

一 盧藏用には「宋侯鳴皋夢趙六予未及報而陳子云亡今追爲此詩答宋主簿兼貽平昔遊舊」(宋侯 鳴皋に趙六を夢み予 未だ報ゆるに及ばずして陳子 云に亡じ今 追いて此の詩を爲り宋主簿に答え兼ねて平昔の遊舊に貽る、『唐文粹』卷十五下、以下「挽詩」と稱す)という長詩がある。亡き友人・趙貞固(趙六)を鳴皋(終南山の支峰)で夢に見たのを詠う詩を宋之間は、二人の友達に贈った。陳子昂のそれに對する唱和詩が、本集卷二「同宋參軍之間夢趙六贈盧陳二子之作」である。盧藏用の方は返歌する前に、陳子昂も死んだ爲、趙貞固と

合わせ二人への挽歌を作る結果となった。以下、その中で陳子昂に關する一節を掲げる(數字は句番號)。

- | | | | |
|----|-------|----------|-----------|
| 27 | 陳生富清理 | 陳生 | 清理に富み |
| 28 | 卓犖兼文史 | 卓犖として | 文史を兼ね |
| 29 | 思縉巫山雲 | 思いは巫山の雲に | 縉り |
| 30 | 調逸岷江水 | 調べは岷江の水に | 逸す |
| 31 | 鏗鏘哀忠義 | 鏗鏘として | 忠義に哀しみ |
| 32 | 感激懷知己 | 感激して知己を | 懷う |
| 33 | 負劍登薊門 | 劍を負いて | 薊門に登り |
| 34 | 孤遊入燕市 | 孤り遊びて | 燕市に入る |
| 35 | 浩歌去京國 | 浩歌して | 京國を去り |
| 36 | 歸守西山趾 | 歸りて守る | 西山の趾を |
| 37 | 幽居探元化 | 幽居して | 元化を探り |
| 38 | 立言見千祀 | 立言 | 千祀せらるるを見る |
| 39 | 埋沒經濟情 | 埋沒す | 經濟の情 |
| 40 | 良圖竟云已 | 良圖 | 竟に云に已む |

長安年間、盧藏用が任官する前、まだ隱棲していた頃の作品と考えられる。この詩と小論第二章で示した「別傳」

の執筆年代に關わる推測が正しければ、兩者は近い時期に、同じ陳子昂を題材として書かれた譯である。

第27句以降の六句は彼の才能、四川の出身だという事實、忠義の志、朋友に對する情誼を詠う。契丹遠征に従軍中の蘄滯在(第33、34句)、歸郷と射洪西山での生活(第35、36句)は、各自「別傳」第四、第五段と内容が重なる。

第37句からの四句は、陳子昂の生き様を總括する。彼自身、「感遇」十で「深居觀元化」と詠っているが、ここでの「幽居探元化」はそれに基づいていよう。第38句では陳子昂による「立言」の不朽性に觸れつつ、その後の二句では彼が抱いた「經濟情」、「良圖」が挫折したと述べる。

ここで「別傳」第三、第六兩段に一度ずつ見えた「王霸大略」という語が想起される。このうち第六段には陳子昂が好まずして長じた「文」の「立言措意」は、「在王霸大略而已」とある。陳子昂の文章はそれ自體が目的なのではなく「王霸大略」、即ち「經(世)濟(民)」の「情」に基づく「良圖」を天下に實現せんが爲の營みだと盧藏用は主張する。これは儒家の傳統ある文藝觀と一致している。

より凝縮して同じ人物を詠う「挽詩」を「別傳」と比べれば、盧藏用の描く陳子昂像は更に鮮明となる。即ち彼の一生を不運の連續として概括する構圖が、そこからは讀み取り得る。

「別傳」はいわば不遇の士の典型的な傳記文である。但し多分に類型化されるにせよ、そこに描かれる陳子昂は極度に理想化されている。先には上書に示された政見、後には契丹征討戰という軍事で國家に盡くそうとし、その望みが破れば、官を退いて著述、この場合は『後史記』と題した大規模な歴史書の執筆に勤しむ。失意の境遇に在る者にとつて、陳子昂の生涯は一種、規範となり得る。悲惨な最期も相俟つて共感、同情を受ける人間像といえよう。

今一つ門地の無い陳子昂が若年で進士科に及第して京官となつた事實も無視できまい。射洪陳氏は地元でこそ有力な豪族だったが、六朝期を通じて、顯官といえる人物を全く出していない。殊に梁末以後、陳子昂までは任官者すら稀になる。度々、一族中から隱者が出た現象は、或いはその反映なのかもしれない。多くは中下級の士人で科擧によ

り世に出た盛唐以後の文學者が、出身階層の點でも、陳子昂を自らの源流と考へたとして、不思議ではない。

陳子昂の實人生が「別傳」どおりだったのは、確かであろう。だが傳記でどの事跡を如何に書くかは、作者の意識による。例えば陳子昂は下獄の經驗等、「別傳」が記さない蹉跌も味わっている。彼の生涯を官人としての挫折、引退後の生活に光を當てて描寫したのが「別傳」、また「挽詩」だといえる。二編の詩文は陳子昂の一生から出仕時、退隱後、双方で儒教道德に適う事柄を取捨選擇の上、再構成した譯で、その功は盧藏用に歸せられるべきだろう。盧藏用による形象化は單に親友である陳子昂の人生を美化する意圖に出るのかもしれない。だがそれは極めて儒教的であり、その意味で多數の讀者に受容されたのではないか。

五 「盧序」、「別傳」の基盤となる思想

——「道」を中心に——

「別傳」が描く陳子昂像は、概ねそのままの形で廣く後

詩人と傳記作者（永田）

代へと普及した。本集卷十附録に收める前監察御史・趙儼①「大唐劍南東川節度觀察處置等使戸部尚書兼御史大夫梓州刺史鮮于公爲故右拾遺陳公建旌德之碑」（以下「趙碑」と稱す）が、その様子を端的に示す。東川節度使だった鮮于叔明の發案で、郷賢表彰を目的として著された同文は、末尾に大曆六年（七七二）十月朔日との日付を明記する。

「趙碑」冒頭の陳氏一族に關わる記述は「陳嗣」、「陳元敬」、「陳孜」といった陳子昂自身の手になる文章をも利用して、「別傳」よりはやや詳しい。だがそれに續く陳子昂の事跡は「別傳」の引き寫しの如き様相を呈す。

確かに「趙碑」には進士合格の年次、初召見の場所、左補闕への就任、埋葬地など獨自の記載も存在はする。また「別傳」とは異なり、陳子昂の最期を服喪による衰弱死とする記述も見える。更に唐詩選集への作品の採録、陳子昂の息子や孫が就いた官職等、「別傳」にはない記事もある。ただ唐人選唐詩への入集狀況や子孫の官歴は、後世の者にしか知り得ない情報といえる。それらを除けば、「趙碑」の内容は、殆ど「別傳」の範圍を越えない。もとより地元

の先人への顯彰文という性格上、「趙碑」が陳子昂に對して同情的な「別傳」と筆致が似通うのは已むを得ない。しかし趙儼が、細部の字句に至るまで、「別傳」の表現から影響を受けたのは確かである。現存する陳子昂の傳記としては、二番目に古い「趙碑」ですら主要な材料を「別傳」に仰いでいる。死後、約七十年にして盧藏用の描いた陳子昂像が受け入れられていた様子がここから窺える。

さて事跡が主題の「趙碑」だが、次に擧げるような陳子昂の文學への批評も僅か二條とはいえ中には存在する。

詩は以て諷す可く、筆は以て削る可し。人 雙つながら全かること罕にして、我 能く兼ねて有す。

嗟乎、道 合う可からず、運 諸う可からず。遂に言を感遇に放ち、亦た阮公の詠懷なり。已而やみね已而やみね、陳公の微意 斯に在り。

前者の陳子昂が詩文（「詩」、筆）共に優れていたという批評は、形式的な贊辭で過度に重視すべきではないのかもしれない。ただ彼に對する同様の評價としては、柳宗元にも類似的の意見は存在するが、最も早い部類に屬す。

後者は碑文末尾の頌中に見える原注である。「道」や「運」に恵まれない中、陳子昂が「感遇」を著したとは、「盧序」の記述を踏まえよう。これに加えて「趙碑」は、「感遇」と阮籍「詠懷」の關連に言及する。「詠懷」と「感遇」の師承關係は『詩式』が具體的な比較により論じて以後、定論となる。^④これに對して趙儼は、連作五言詩の形式、作者の眞意をはかりかねる韜晦した表現から受けた印象により、批評したに過ぎまい。ただ「詠懷」が「感遇」に與えた影響を最初に指摘したという意味で、『詩式』に約二十年、先立つ「趙碑」に於けるこの一節は興味深い。概ね「別傳」に基づく「趙碑」だが、「盧序」からも「文章道喪五百年、得陳君焉」の一文を引用する。これが「道喪五百歲而得陳君焉」（「盧序」中段）の變形なのはいうまでもない。既に見たとおり皎然、顏真卿も「盧序」の同じ部分を引いて攻撃していた。趙儼と彼ら二人の間には「盧序」への捉え方に肯定、否定という方向性の差はある。ただ陳子昂を一旦、衰えて後、五百年経った「道」の回復者とした「盧序」の見解に注目した點は共通している。

「盧序」、「別傳」には、その他にも「道」字が散見する。^⑤

「盧序」前段では陳子昂が現れる直前、六朝末期・初唐の文學を評して「風雅之道」は消え去ったとし、「別傳」第七段でも彼の死を指して「言絶道冥」、「道之將喪也」という。盧藏用が陳子昂の文學、生涯を記述するに當たり「道」との関係に着目していた様が窺える。本章では「盧序」、「別傳」がその敘述に於いて基盤とした哲學について、盧藏用が抱いていた「道」という觀念を中心に考察したい。僅かな詩文しか現在に傳えていない盧藏用の思想を、全體として考えるのは、極めて難しい。この狀況下で『唐摭言』卷四「師友」所收の「答毛傑書」^⑥は貴重な材料といえる。同書簡執筆の経緯は毛傑「與盧藏用書」に詳しい。盧藏用が「道」を貴ぶと聞いた「雲夢子毛傑」（この號以外、事跡は未詳）は、書状を送つて、流刑地の彼にその處世觀を尋ねた。次に引くそれへの返書が「答毛傑書」である。出典が筆記なので、信憑性に難はあるが、そこには盧藏用晩年の「道」に關する興味深い見解が見える。

毛子足下、身を訪道に勤め、氣瘴を毒とせず、糧を

詩人と傳記作者（永田）

鬼門に裹み、雲海に放蕩し、多とするに足る有り矣。

一昨 遺れず、猥りに書札を辱くし、我に遐意を期し、子に道眞を詢い、人をして慙愧せしむる也。僕 之を知る矣、士の代に生まるれば、則ち志を深蔽に冥くし、木を穹室に滅ぼし、九丹を鍊り以て咽氣し、三秀を味わい以て詠言する有り、固に將に蒙を養い理を全うし、以て天性を鳴らす能わざらんとするは、則ち其の上也。義 當途を感じしめ、説 時主を動かし、全徳を懷き以て自ら達し、山河を裂き以て貴きを取る、又た其の次也。誠信申べられず、忠孝 胥みな缺き、獨り魑魅を禦ぎ、永く豺虎に投じ、面目 以て數うる可く無く、心膺を椎ち以て天に問うに至る、斯れ最も下也。僕 壯年に在り、常に其の上を慕い、先に貞 後に黷、卒に憂患に罹り、家に負きて孽と爲り、身を此に置き、何の顔か復た道德を講ぜん哉。

内容より以上を「答毛傑書」の前半としておく。まず盧藏用は、「士」の生き方を三等級に分かつ。「九丹」（丹藥）、「咽氣」（呼吸術）、「三秀」（靈芝）は道術の用語、「養蒙」

は「周易」「蒙」象傳が出典の言葉、自己の意思・才能を外面に表さない態度をいう。これらと合わせて更に「冥志深蔽」、「滅木穹窒」と喩えられる自らを曝け出さず、抑制する處世が、ここでは最高だとされる。

それに次ぐのが、所謂「功名」を達成した生涯である。これら二者を成し得ず苦惱する人生は、最下位に置かれる。續いて罪を得てから後に盧藏用自身が抱いた感慨を述べる。

然りと雖も、少くして立言を好み、亟やかに長者の説を聞き、老いて彌いよ篤く、猶お薄暮の咎を憐れむ。我に數年を加うれば、大過無きに庶し。莊生鷓鴣の喩え、則ち乾坤龍馬の旨に好かる可く矣、風を培い海を運らすは、則ち六九の源に差たがう無く矣、之を正氣に隣たがれば、則ち心を洗いて密を藏するに由有り矣。卷を開きて獨り恬然として眞に會するを得、知らず 寰宇の寥廓なるを、知らず 生の謝とを、斯れ亦た曖昧の守る所、何ぞ必ずしも是と爲さんや。儻し吾人 予を起ち掌を指して今の隱几を説かしむれば、亦た樂しからず乎。道は稊稗に在りて相阻む無く、曷ぞ區區を爲し、

勞を過こして劍を按ぜん也。頃 風眩 疾を成し、下涙 復た厲し、筆 此れを力めて還た答う。銓次する所無し、日期を淹遲す、我を責めざるを庶う。盧藏用 頓首。

後半では、まず若くより「立言」を好み、老後も弛まぬ自らの人生を顧みる。「加我數年、庶無大過」は晩年、「易」を熱心に學んだ孔子の言葉（「論語」「述而」）に基づく。

「莊生鷓鴣之喩」は「莊子」「内篇・逍遙遊」の寓言、「培風運海」はその大魚である鷓より化した大鳥・鷓が羽ばたく様を表す。「乾坤龍馬」は天地と神獸、六と九は各々陰・陽數の代表、「六九之源」は陰陽の根源を指す。この一節は「莊子」が關知し難い事象を表現し得ているという。

だがこれ以後、文脈は一變し、『莊子』全書冒頭より展開される規模雄大な議論の中に潛む空虚さへの批判が見られる。「隱几」とは、机に寄り掛かつて、眠ったり、樂にしたりする様を言い表している。流滴の境遇を却つて、安

息の生活と捉える視座が、そこには見受けられる。

稗（イヌビエ）や稗（クサビエ）にも、「道」が存在するとは、『莊子』「内篇・知北遊」中の問答に因む。婉曲に毛傑をたしなめるかのような口調で、道を追及して爲される様々な苦勞に疑問を呈しつつ、この便りは結ばれる。

「答毛傑書」、殊にその後半には『莊子』を中心とする道家思想の影が色濃い。小論第二章で述べたとおり盧藏用は、隱逸者として前半生を過ごした。もとより彼の隱棲には、任官を求める賣名行爲の側面も強い。だが隱者であり、老莊の注釋者でもあるという盧藏用の經歷^⑦を念頭に置けば「答毛傑書」が前半で服藥や導引といった登仙法をも含む道家思想に準據した處世觀を最高とするのも頷ける。

「別傳」に描かれる陳子昂の在り方は、そのうちある程度の部分が、ここで最上位とされる生活に極めて近い。第一段に登場する「墨翟祕書」に基づくと思しい祖先の隱棲を含めて、第三段に於ける黄老の愛好、第五段の京官という地位をも弊履の如く投げ捨てた退隱と「種樹採藥」と表現される西山での暮らし、第六段に見える「江上丈人論」

詩人と傳記作者（永田）

の内容とといった記載は、その典型だといえよう。もとよりこれらが、實際に陳子昂の事跡だったのも確かである。だが老莊の「道」に適う事柄を特筆し、「別傳」の讀者に強い印象を與える處置を盧藏用が施したのは間違いない。

ただ彼の提起した「道」は、老莊哲學のみに依據する譯ではない。『莊子』の氣宇壮大さに疑義を示し、卑近な事物（この場合は「稗稗」）にも「道」は含まれると説く—その比喩にはやはり『莊子』を使うが—のは既に見た。更に現實的な「道」を重んじる價值觀も、「士」の生き様で第二位とされた段階で確實に見て取れる。やや機械的だがこの「義感當途、説動時主」は立言、「懷全德以自達」は立德、「裂山河以取貴」は立功と分類できる。『春秋左氏傳』（襄公二十四年）に見えて以来、長い傳統をもつ「士」が不朽たり得る三つの手段が、ここでは一體化している。老莊に基づくその下位に置かれるとはいえず、「答毛傑書」は儒教道德を基調とする處世法をも、確かに重視している。「盧序」、「別傳」に強く漂う儒教の色彩は、既に指摘した。前者の内實を伴う文學を良しとする見識はまさに

その表れであろうし、また後者の「王霸大略」實現を目指して文章を著す陳子昂像は、「答毛傑書」にいう言論、德行、功業が一つに融合した境地の理想的な形態といえる。

次に盧藏用の言説が、後人へと受容された理由に關し、「道」を手掛かりに考えてみよう。「文」を「道」の傳達手段と考える「載道」説は、古くより根強い影響力をもってきた。また所謂「道統」論では、古代の聖人から「道」は代々、受け繼がれてきたとする。「載道」、「道統」といった觀念は、宋儒、特に「道學者」によって盛んに喧傳され始める。だがその萌芽を韓愈やその門下を始めとした古文学家たちに發見できるというのは、既に定説である。

「原道」(昌黎先生集)卷一で韓愈は、孟子以後、途絶えてしまった古代の聖人たちより始まる「道」の傳承過程を描いてみせた。その系譜中の人物には出入があるにせよ、韓門の弟子たちは、自分らの師をもその中に位置付け始めている。ここに及んで韓愈は、「古文」復興の擔い手であると同時に、孟子、或いは揚雄の後、永らく途絶していた「道」の傳承者としての地位をも得るに至った。

五百年振りに現れた「道」の繼承者として、陳子昂なる一個人に文學の復興者という役割を集約してみせた「盧序」は、正に「道統」論の先驅といえる。「道」と「文」を密接に關連付けた後世の古文家たちの「載道」説は、盧藏用の見解に極めて近い。唐代、多くの文學者により陳子昂が尊崇された理由の一端は、ここにあると思しい。即ち彼らは陳子昂の詩文もさることながら、盧藏用により形作られた「道」に基づく彼の人物像、文學史上の位置に魅力を感じ、また自らの源流を見たのではないか。贊同するか否かを問わず、唐人が度々、「盧序」を引用したのは、そこに見られる主張に斬新さを感じ取ったからではなからうか。

小論で觸れ得たのは、「盧序」や「別傳」が、陳子昂の人格と文學を後世に向けて、如何なる方向に決定付けたかという問題に過ぎない。彼自身の作品に示される文章觀、その淵源が、盧藏用のそれとどのように關係するか、兩方の比較を通したこれらの分析は、今後の課題としたい。

註

- ① 完全な形で現存する最古の陳子昂詩文の別集で、四部叢刊初編集部に弘治四年（一四九一）九月の序をもつ明版の影印を収める。小論では同書所収の作品は全てこれを底本とする。
- ② 「草堂集序」、孫逖集序の執筆、『詩式』の完成は各々七六年十一月、七六年八月（以上、文末に年月を明記）、七八九年五月（卷一「中序」に紀年がある）頃だと考えられる。陳子昂の没年については注④の略年表にも示したが、七〇〇年前後とする説が有力である。
- ③ 例えば現代の中國文學史で陳子昂の文學論として、殆ど必ず提起される「文章道弊五百年矣、漢魏風骨、晉宋莫傳」の一節で著名な「修竹篇」序に唐人は全く言及していない。
- ④ 小論の敘述に關わる盧藏用の事跡を中心とした略年表を以下に掲げる。出典を挙げない事實の繫年は新舊兩唐書の「玄宗紀」、「盧藏用傳」に、？を付けた事柄は筆者の推測による。
- | | | | |
|---------|--|--|--|
| 六八五年八月 | 睿宗の皇子・李隆基誕生。陳子昂、「爲豐國夫人慶皇太子誕表」を著す？ | | |
| 六九九九年七月 | 陳子昂の父・陳元敬没、その服喪中（Aは翌年とする）、陳子昂が死去する。 | | |
| 七〇〇年 | 陸餘慶、鳳閣舍人に就任（B）。盧藏用「宋侯鳴皋夢趙六豫未及報而陳子云亡今追爲此詩答宋主簿兼貽平昔遊舊」（小論第四章に挙げた「挽詩」）を作る（Cに | | |
-
- | | |
|---------------|-------------------------------------|
| 七〇一年 | 王無競、監察御史を離任（Bによる。Cはより細かくこの年十月に繋げる）。 |
| 長安年間（七〇一—一〇四） | 盧藏用、初めて官に就く（Cは七〇二年八月以降に任官したとする）。 |
| 七〇四年正月 | 左拾遺の任に在った盧藏用、武則天に興泰宮造督を諫める文章を奉る（C）。 |
| 七〇一年七月 | 李隆基、太子となる。これ以後、盧藏用による陳子昂集編纂が終結する？ |
| 十一月 | 盧藏用、守兵部侍郎に在職（E）。この年より以降、黃門侍郎に就任（F）。 |
| 七〇二年六月 | この時点で盧藏用、黃門侍郎の後職として左遷された工部侍郎に在任（G）。 |
| 八月 | 李隆基、帝位に即く（玄宗）。陳子昂集の編纂、これ以前に一應、完結する？ |
| 七二三年七月 | 玄宗、太平公主一派を肅清、盧藏用はこれに連座して新州へと流刑になる。 |
- 後、驪州に移された盧藏用は交趾の反亂を防禦した功績で昭州司戸參軍として官界に復歸、やがて黔州都督府長史、判都督事に任命されるが、實際には着任しな

七一六年 盧藏用撰「唐景星寺碑」、立てられる

(H1)。この頃までは盧藏用、生存？

七一七年正月 盧藏用撰「建福寺三門頌成碑」、立てら

れる(H2)。間も無く盧藏用没？

利用文獻

A 彭慶生氏『陳子昂詩注』(四川人民出版社 一九八一年)

附録「陳子昂年譜」

B 韓理洲氏『陳子昂研究』(上海古籍出版社 一九八八年)

「生卒年考辨」

C 陶敏、傅琮兩氏『唐五代文學編年史』初盛唐卷(遼海出版

社 一九九八年)

D 陶敏、易淑瓊兩氏『沈佺期宋之間集校注』(中華書局 二

〇〇一年)下「沈佺期宋之間簡譜」

E 北京圖書館金石組編『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯

編』(中州古籍出版社 一九八九年)二〇「豆盧光祚妻薛氏

墓誌」

F 嚴耕望氏『唐僕尚丞郎表』(中央研究院歷史語言研究所

一九五六年)

G 黃永武氏主編 新文豐出版公司刊『敦煌寶藏』十九(一九

八一年)斯二四三號「佛說示所犯者瑜珈法鏡經」、同二十

四(一九八二年)斯二九二六號「佛說校量數珠功德經」題記

H1、H2 各々『寶刻叢編』卷十九所引「諸道石刻錄」、同

書卷一所引「集古錄目」

なお「寶刻類編」卷二は盧藏用書「國師玉泉寺大通禪師碑」

を七二二年の建立とするが「八瓊室金石補正」卷五十が疑義

を呈しているようにその頃まで盧藏用が生きていたかは疑問。

⑤ 司馬承禎は著名な道士で陳子昂と盧藏用共通の友人、本集

中の文章にもその名は散見する。

⑥ 注④利用文獻B。陸餘慶、王無競の官名を根據とする。注

④所掲の年表を参照されたい。

⑦ 注④利用文獻Bは、その注釋⑤で「盧序」も「別傳」と同

時に著されたと主張している。

⑧ 「群書四部錄」、「初學記」の成書年代は「唐會要」卷三十

六「修撰」の記載による。

⑨ 張錫厚氏『敦煌本唐集研究』(新文豐出版公司 一九九五

年)「故陳子昂集」補説は注釋⑧で伯三五九〇號を避諱

(基字を缺筆)から、玄宗期以後に書寫されたと結論付ける。

⑩ 「北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編」三十三所收、但し

現在の「盧序」には、これに當たる記載は無い。崔璩らが交

遊した旨の記述は、本集卷五「昭夷子趙氏碑」に見える。

⑪ 陳寅恪氏『金明館叢稿初編』(上海古籍出版社 一九八〇

年)「劉復愚遺文中年月及其不祀祖問題」によれば劉焯は八

二二年生まれ、八五〇年進士及第、吳在慶、傅璇琮兩氏『唐

五代文學編年史』晚唐卷(遼海出版社 一九九八年)による

と八七三年までは生きていた。

⑫ 前段最初の「粲然可觀」、最後の「風雅之道」は、「文選」

卷首・梁・蕭統「文選序」の「風雅之道、粲然可觀」なる一節に基づく。また「騷人」の勃興を記す件も同序を踏まえる。

⑬ 否卦☶の六爻全ての陰陽が變爻により逆轉すれば泰卦☳へと變化し、全く反對の状態を表すという意味である。

⑭ 本集は賦に續き古詩を並べた部分の冒頭に「感遇」を配する。これが盧藏用自身による處置ならば、「盧序」に見える批評同様、彼の「感遇」に對する尊重を示すのかもしれない。

⑮ 「史記」卷二十七「天官書」、卷一百三十「太史公自序」にも「天人之際」の用例がある。また司馬遷が用いたこの言葉には董仲舒の天人相關説（『漢書』卷五十六「董仲舒傳」に引く彼の上疏に「天人相與之際」という語が見える）からの影響を考へるべきだろう。なお陳子昂自身も本集卷六「率府錄事孫君墓誌銘」で「庶幾天人之際」という表現を用いる。

⑯ 闕名『歷代名賢各論』（南宋に成立か）卷七十四「則天」二所收の「盧序」は「昔常與余有志形之契」以下を缺く。

⑰ 例えば「昔者孔宣父以天縱之才」以下の件は「楚辭章句・絞」や傳・孔安國「尚書序」（『尚書正義』卷一）等に淵源を求め得る。ただ「盧序」が直接に基づいたのは、『隋書』卷四十九「牛弘傳」所引・牛弘の上表に見える「孔子以大聖之才……制禮刊詩、正五始而修春秋、闡十翼而弘易道……掃地皆盡……繼踵而集……憲章禮樂」、同卷三十二「經籍志」一・序の「孔丘以大聖之才……乃述易道而刪詩書、修春秋」といった部分だと思われる。

詩人と傳記作者（永田）

⑱ 唐初、多くは勅命により陸續として編纂された正史の文苑（文學）傳や各王朝を代表する文人の傳、また類書等の序・論が、この流れに先鞭をつけたのは、周知のとおりである。

⑲ 陶敏、李一飛、傅璇琮三氏『唐五代文學編年史』中唐卷（遼海出版社 一九九八年）に詳しい考證が見られる。

⑳ この後、劉克莊は「盧序」を「其論歷代文弊皆不錯」と評しつつ、上官儀を批判した一節に觸れ、皇后だった武則天の廢立を企てた上官儀を貶めるのは、盧藏用が屬していた政治的黨派の首領である太平公主（武則天の娘）に媚びる爲だったという。「盧序」の一部について執筆目的を推測している譯だが、特に根據は示されていないので小論では取らない。

㉑ 『隋書』卷三十四「經籍志」三「諸子・五行」注所引の梁・阮孝緒「七錄」に「白獸（唐の高祖の祖父の諱を避け「虎」を「獸」に改めたか）七變經」、「墨子枕中五行要記」、「五行變化墨子」、同「諸子・醫法」に「墨子枕中五行紀要」といった類似の書名が見える。因みに『倭名類聚抄』（十卷本）卷二には僅か一條だが「墨子五行記」からの引用がある。

㉒ 劉君安は劉根、やはり葛洪の著作とされる「神仙傳」（『太平廣記』卷十）によれば、後漢の仙人である。「神仙傳」には墨子が仙術を授けられた記事や、劉政、孫博（同卷五所引）、封君達（『歷世眞仙體道通鑑』卷二十一、「神仙傳」の引用か）といった墨子の流れを汲む神仙の名も見える。

㉓ 墨家と神仙思想の關係は孫詒讓「墨子問詁」「墨子後語」

下「墨子緒聞」、章炳麟「檢論」(上海石文社 一九一五年)
 卷三「學變・附黃巾道士緣起說」、張心徵氏「偽書通考」(商務印書館 一九三九年) 下「道藏」洞神部「太上墨子枕中記」に考證がある。なお陳子昂の詩作と陳氏の「豪」や隱逸といった傳統との關連については、王運既氏「漢魏六朝唐代文學論叢」(增補本 復旦大學出版社 二〇〇二年)「陳子昂與他的作品」、賈晉華氏「蜀文化與陳子昂、李白」(「唐代文學研究」第三輯 一九九二年)、杜曉勤氏「初盛唐詩歌的文化闡釋」(東方出版社 一九九七年) 第九章「陳子昂的人格精神和詩歌創作」に言及が見える。

②④ 敦煌本と「英華」は「莫不知也」の「不」を缺く。理解者のいない孤獨感を表現しているならば、「知る莫き也」の方が良い。ただ「知らざる莫き也」の場合でも、陳子昂の知名度を強調していると解釋すれば、意味は通じるので、本集のままにして、文字を改めない。

②⑤ 江上丈人には隱者、老子の注釋者、神仙と漢魏六朝を経て神祕化されていく河上丈人の傳説と重なる側面が指摘できよう。「莊子」「雜篇・列禦寇」の「河上」の貧者が息子の得た「千金之珠」に目もくれない話は、阮籍「詠懷」其五十九「阮嗣宗集」(卷下)、劉宋・袁淑「眞隱傳」(「太平御覽」卷五百十所引)にも見えるが、前者には「河上有丈人」の句があり、後者では明らかに貧者を「河上丈人」と呼んでいる。「千金之劍」を斷つた江上丈人との共通性は存在するかと思

う。なお河上丈人(河上公)の演變については楠山春樹氏

『老子傳説の研究』(創文社 一九七五年) 前篇「老子河上公注の研究」、王卡氏「老子道德經河上公章句」(中華書局 一九九三年) 前言一、河上公章句之作者與時代」が詳しい。

②⑥ 「別傳」中に「識者稱其實錄」と序・傳の普及をいう記述があるのは、奇異な感を覚えさせる。或いは一旦、「別傳」の初稿が廣まって後、この部分は加筆されたのかもしれない。
 ②⑦ 「唐詩紀事」卷十「盧藏用」所收の同じ詩とは異同がある。○年の條及び同條利用文獻のC並びにDを参照されたい。

②⑨ 本集は「深居觀元化」中の「居」を「閨」に作り、「元化」の傍らに「羣動」と併記するが他本により改める。

③⑩ 出獄後、釋放を感謝して奉られた上奏文である「謝免罪表」が本集卷三に收録される。

③⑪ 「永樂大典」卷三千一百三十四「九眞・陳」所收の「趙碑」は「監察御史」に作る。

③⑫ 「正聲集」(散佚)に十首、採録されたという。「正聲集」については陳尙君氏「唐代文學叢考」(中國社會科學出版社 一九九七年)「唐人編撰詩歌總集叢録」に考證が見える。

③⑬ 「增廣註釋音辯柳先生集」卷二十一「楊評事集後序」に見える。

③⑭ 「詩式」卷三「論盧藏用陳子昂集序」(小論第一章の引用では省略)で「詠懷」其十三(「阮嗣宗集」卷下)と「感遇」

二十六の類似を述べ、陳子昂には獨創性が無いとする。

- ③⑤ ここで本集より「祭文」の全體（『唐詩紀事』卷八「陳子昂」所收の「祭文」とは異同あり）を掲げるが、この末尾近くにも「天道」の語がある。「子之生也、珠圓流兮玉分潔。子之沒也、太山頽兮良木折。士林閔寂兮人物疏、門館蕭條兮賓侶絕。嘆佳城之不返、辭玉階而長別。嗚呼、置酒祭子子不顧、沈聲哭子子不迴。唯天道而無託、但撫心而已摧。尙饗」
- ③⑥ 「答毛傑書」の標題は「全唐文」卷二百三十八に做う。同書簡の底本には、雅雨堂叢書本「摭言」を用いる。なお「答毛傑書」については、羅根澤氏『隋唐文學批評史』（商務印書館 一九四三年）第六章「早期的古文論・四 陳子昂與盧藏用的提出載道說」に文學理論と關連付けた言及がある。
- ③⑦ 「新唐書」卷五十九「藝文志」三「丙部子錄・道家類」に「盧藏用注老子二卷 又注莊子內外篇十二卷」とある。